健康社会学研究会

ニューズレター　No.60

発行：健康社会学研究会
事務局：〒504-8511 岐阜県各務原市那加桐野町５-68 東海学院大学健康福祉学部　森川研究室内
FAX：058-389-2205　E-mail：healpro@tokai-wjc.ac.jp
ニューズレターＮｏ．60／2011 年１月　　編集担当：渡辺多恵子

新年のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様には、気持ちも新たに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

2010 年の研究会では、健康社会学セミナーや日本公衆衛生学会自由集会において、「Win-Win な関係を通じた地域の健康づくり」をテーマに取り上げました。地域の保健活動を取り巻く社会情勢も変化している今日ですが、ヘルスプロモーションの概念を軸とした活動を原点に、会員の皆様が各地域で活動されることにより、明るい未来を創りあげていくことができると確信した 1 年でした。また、2010 年の日本公衆衛生学会は東京開催だったためか、自由集会には多くの非会員の参加がありました。多くの非会員の方から、研究会について興味をもっていただくことができ、大変嬉しく感じました。わが研究会の活動について PR していくことは大変重要であり、2011 年以降さらに積極的に PR 活動を行っていきたいと感じた瞬間でもありました。

2011 年の研究会では、ここ数年企画の検討を重ねてまいりました出版企画を本格始動させていきます。健康社会の実現に向けた書籍を作り上げていくことを目指します。ヘルスプロモーションの 5 つの活動を柱に構成していく予定です。本ニューズレターに詳細記載がございますのでぜひご覧ください。

本年も会員皆様のそれぞれの研究、教育、地域での活動が、実りあるものとなるよう祈念いたしまして、本年のご挨拶とさせていただきます。

（健康社会学研究会運営委員　鈴木茜）

２月月例研究会のご案内

日　時：平成 23 年２月 19 日（土）15:00-17:00（受付 14：30-）
場　所：日本子ども家庭総合研究所 会議室
参加費：会員/無料　非会員/1,000 円

【 テーマ・報告者 】

●子育てひろばの機能についての一考察 - ひろば効果尺度の開発から -
　斉藤 進（日本子ども家庭総合研究所母子保健研究部）

●障害者就業・生活支援センターとの連携下における就労移行支援機関の実践過程に関する考察
　森川 洋（東海学院大学健康福祉学部）

※ 研究会終了後、懇親会を広尾駅周辺で開催します。

第 46 回健康社会学セミナー報告（平成 22 年 12 月 4 日開催）

テーマ：元気な職場をつくるコミュニケーション
～ストレス対処能力 SOC を高める～
講　師：蝦名玲子氏
健康社会学者・博士（保健学）
ヘルスコミュニケーションスペシャリスト
グローバルヘルスコミュニケーションズ　代表取締役

「みなさんこんにちは～♪」と、蝦名玲子さんの明るく元気な一言から、終始和やかなムードの中、第 46 回のセミナーが開催されました。

今回のテーマは、個人的にも非常に関心の大きかった「ストレス対処能力」についてでした。今は、生きているだけでも何かしらのストレスがあると言われるなか、「元気になる力」を高めるというテーマは、誰もが必要としている事ではないかな？とワクワクしながらの参加となりました。

誰もが記憶に新しいチリ鉱山の落盤事故のニュースや、身近な事例を用いながら日常のストレスについて説明があるたびに、参加者は大きくうなずいていたのが印象的でした。

ストレスに打ち勝つ「元気になる力」には３つの要素があり、この「やるぞ感」「わかる感」「できる感」の３つの要素の高低で、まずは自分がどんな傾向にあるかを簡単な質問シートに回答し、自分のストレス対処タイプの傾向を分析しました。質問シートに関しては、蝦名玲子著『元気な職場をつくるコミュニケーション』（法研）の冊子の中に掲載されているので、興味のある方は（前回、本セミナーのお知らせとともに送付しましたチラシから）お申し込みください。

セミナー後半では、自分の傾向を知った上で、いくつかのストレスフルな場面設定について演習を行い、まさに“実践的”なセミナーとなりました。個人的には、演習時の蝦名さんの掛け声「スタ～ト♪」が、何ともかわいらしく、思わず癒されてしまいました。緊張感を持たせない、蝦名さんの人柄の良さとセンスの良さが随所にエッセンスとしてちりばめられていて、非常に居心地のよいあっという間の３時間半となりました。終了後には参加者の方からも「楽しかった～」という声が聞こえて来ていました。

（健康社会学研究会運営委員　白子純子）

第 69 回日本公衆衛生学会自由集会報告（平成 22 年 10 月 28 日開催）

テーマ：Ｗｉｎ－Ｗｉｎな関係を通じた地域の健康づくり
基調講演：斉藤　恭平 氏（東洋大学ライフデザイン学部 教授）
話題提供：守屋希伊子 氏（三郷市市民生活部健康推進課 係長）
遠藤　延人 氏（飯能市福祉部健康づくり推進室 主任）

昨年実施された日本公衆衛生学会第 69 回総会・学術大会の２日目、10 月 28 日に例年本研究会で主催している自由集会を、今年度も実施致しました。６月のセミナーで企画した内容を基本にして、「Ｗｉｎ－Ｗｉｎな関係を通じた地域の健康づくり」というテーマで開催されました。

私（東洋大学　齊藤恭平）より、健康なまちづくりのあり方や活動のヒントに関して話題提供をさせて頂いた後に、埼玉県三郷市の保健師である守屋希伊子さんと、同じく埼玉県飯能市健康づくり推進室の遠藤延人さんから、それぞれの市のウォーキングを中心とした健康づくり事業の取り組みに関して説明をして頂きました。三郷市はＩＣウォークというハード＆ソフトを導入した推進活動。そして飯能市は公民館や商店街そして行政が一体となったウォーキング推進が紹介されました。全国の多くの自治体の中で健康づくり事業のソフトとしてウォーキングが採用されていますが、今回紹介された２つの自治体はＩＣやウォーキングマップの整備といった環境整備に始まり、その環境を地域の様々な組織的リソースを巻き込み地域全体のムーブメントに繋げていった画期的な取り組みであったと思われます。

今回の自由集会には会場にあふれるほどの参加者があり、活気ある意見交換がされていたことも収穫であったと思われます。とくにこのような取り組みを行政と地域との間に立って調整している九州のＮＰＯの方々からもご意見を頂き、発表した守屋さんや遠藤さんにとっても、これまでのご自身の活動の裏付けや、これからのヒントになることが多く得られた機会であったと感じられました。自由集会がこのように行政事業のバージョンアップに繋がる機会となることは嬉しいことですね。来年度は秋田です。皆さんまたお会いしましょう。

（東洋大学ライフデザイン学部 斉藤恭平）

出版企画　執筆者の募集

昨年度から運営委員会内の出版担当委員を中心に出版を企画し、運営委員会においてその具体的な検討を進めてまいりました。また、総会等でも出版構想をご報告してまいりました。

今後、会として本格的に出版に向けた活動を進めることとし、下記により執筆者を会員の皆様に広く募集いたします。

出版企画に賛同いただき執筆いただける方は、別紙のエントリーシートに必要事項をご記入の上、事務局に郵送、FAX、メールのいづれかにてご提出ください。また、出版・執筆に関する問い合わせも、事務局までお願いいたします。

健康社会学研究会　代表　松岡正純

１．出版企画のあらまし

研究会の会員を執筆者とし、健康社会学研究会として、健康社会の実現に向けた本を出版する。

構成は、ヘルスプロモーションの 5 つの活動（健康的な公共政策づくり、健康を支援する環境づくり、地域活動の強化、個人技術の開発、ヘルスサービスの方向転換）を柱とし、執筆原稿の内容に応じて各柱に振り分けする予定です。

ただし、詳細の構成は、執筆者のテーマや原稿内容により調整することもあります。

出版社は、数社候補がありますがまだ未決定のため、会員皆様でネットワークをお持ちの方は、情報をお寄せください。

２．執筆者募集期間：２月２１日（月）まで

３．執筆条件：原稿を期限までに執筆・チェックしてくださる方

４．今後のスケジュール予定

①執筆者の検討：平成 23 年 2 月下旬～3 月下旬

②原稿依頼：平成 23 年４月中　③原稿提出：平成 23 年８月末

④原稿チェック・修正：平成 23 年 9 月～12 月下旬

⑤入稿：平成 24 年 1 月下旬

⑥発刊時期：平成 24 年 3 月末

事務局

〒504-8511 岐阜県各務原市那加桐野町 5-68

東海学院大学 健康福祉学部　健康社会学研究室　森川 洋

FAX：058- 389-2205　　E-mail：mrkw@tokaigakuin-u.ac.jp

別紙エントリーシートを電子媒体で希望される方は、事務局までお申し出ください。

新入会員紹介

●高澤めぐみさん（江戸川区健康部健康サービス課葛西健康サポートセンター）

はじめまして。22 年 4 月から江戸川区葛西健康サポートセンターで保健師として働いております、髙澤めぐみと申します。以前より、何度か本研究会にお邪魔させていただいていたのですが、この度、正式に健康社会学研究会に入会させていただきました。まだまだ未熟者ですが、たくさん勉強していきたいと思っておりますので、皆様どうぞよろしくお願い致します。

●高橋静香さん（取手市介護老人保健施設緑寿荘）

順天堂大学健康社会学ゼミを卒業し早１６年、ようやく今の職業と学生時代に勉強してきたことが繋がっていることを実感し入会しました。現在は介護老人保健施設の施設運営に携わっていますが、「スタッフが健康でなければ利用者を健康にできない！」をモットーに活動をしていきたいと思っております。

●松川久美子さん（岩手県環境保健研究センター保健科学部）

私は、岩手県の地方衛生研究所に勤務している保健師です。地方衛生研究所に保健師と栄養士が配置されているのは、全国でも珍しいようですが、今は専ら、特定健診・特定保健指導事業の研修や保健統計情報の提供が主な業務になっています。私がこの会に入会したのは、誘われるまま参加した自由集会と食事会が面白かったからの一言に尽きます。保健活動は、地域の資源によっていろいろな活動に展開されますが、この会に参加する方からお話を伺い、発想の視点が広がりとても参考になります。ここ盛岡は、東京から新幹線で 2 時間半です。更に 1 時間すれば秘境まがいの温泉と美味しい食事ができるところです。そこで提案ですが、岩手で研究会を開催してみるというのはいかがでしょうか。会員の皆さんはリフレッシュできるし、私は岩手でこの会を紹介でき仲間が増えるかもしれません。まさに、WIN-WIN ではないでしょうか。今後とも、よろしくお願いします。

松田正巳，奥野ひろみ，菅原スミ，藤井達也，小山修　編

やってみようプライマリ ヘルス ケア
変わりゆく世界と 21 世紀の地域健康づくり
第 3 版
2010 年，やどかり出版, 2,300 円

まずは、本書の編者でもある小山氏より次のようなご紹介を頂いた。

本書は 1993 年に島内・松田編著で東京ＰＨＣ研究会（代表　松田正巳）のメンバーが中心に分担執筆した「みんなのためのＰＨＣ入門」（垣内出版）を刊行したのが始まりです。その後、絶版となったため、大幅に見直し、内容をＰＨＣの解説からＰＨＣの実践にシフトして再編集したのが本書初版でした。第 3 版の特徴の第 1 は、WHO2008 報告書「 PHC- Now more than ever」の解説（松田氏）、第 2 は「ＰＨＣ入門」に掲載した故橋本正巳先生、石川信克先生（結核研究所）等の玉稿の最収載。第 3 は、新たな執筆者の参加と原稿の差し替えなどです。PHC の 4 原則を核にしながら国内、国外の保健活動を「実践者」向けに再編集したのが本書です。本書のおすすめは、何といっても松田氏の担当部分です。特に PHC- Now more than ever の解説と、日本の保健・医療施策を PHC から見た二元論的な医科学モデル批判を、母親の介護体験をもとに論述した部分などです。

小山氏もすすめておられる第一部の総論では､次のような指摘がなされている。国内外の文献を整理する中で「どれだけ生きたか」から「どう生きたか」あるいは「どのように生きているか」というプロセスを健康領域においても検討されるべき時代が再び訪れていることである。また人権を、自由権（自己の自由を追求する権利）と社会権（社会的な平等性に関心を持つ権利）という視点から捉え、自由権に偏りつつある中、アルマ・アタ以降の WHO の主張、なかでも 1998 年の HFA21 が自由権と社会権のバランスを再び取ろうとする動向がみられるということである。いわば医学モデル中心の画一的な保健サービスへの疑問符と、人権を始めとした社会的要因を柱とした保健福祉システムを切り口とした社会システムの再構築の必要性であり、その鍵として改めてプライマリ・ヘルス・ケアへ立ち返ることが主張されている。さらにアルマ・アタ宣言以降から PHC-Now more than ever までの 30 年に至る時間軸の中にヘルス・プロモーションに関するオタワ憲章を位置付け、その関係を改めてわかりやすく解説されている。我が国における健康政策が自己責任論へと傾き続ける中、本来の自転車の両輪としてのプライマリ・ヘルス・ケアとヘルス・プロモーションという位置づけを再提示されたことは、健康社会学的アプローチに重点を置いてきた実践家に、改めて勇気を与えてくれる。本書は II 部の事例編、III 部の講演編へと続く。学生、実践者を対象とされ、(改訂の際に示された)本書の使い方も具体的に提示されている。特にまちづくりに携わる、医科学モデルと社会科学モデルの狭間でジレンマ体験を積み重ねている様々な立場の実践家には､是非手に取って頂きたい一冊である。

（健康社会学研究会運営委員　森川 洋）

事務局：東海学院大学 健康福祉学部 健康社会学研究室 森川 洋

FAX：058-389-2205

執筆エントリーシート

氏名		所属 （専門職は、職種も記入）	
連絡先住所	〒		
電話		メール	
執筆概要 （400 字程度） 原稿内容を簡単に記載			
執筆 キーワード （5 つ程度）			
位置づけ （該当項目に〇）	１. 健康的な公共政策づくり　２. 健康を支援する環境づくり ３. 地域活動の強化　４. 個人技術の開発 ５. ヘルスサービスの方向転換		
分類	１. 理論　２. 実践報告（事例）　３. 研究（データに基づくもの） ４. その他（　　）		
執筆状況 （いずれかに〇）	原稿あり （既に論文など執筆に関する原稿がある）	新規執筆 （出版のために新たに原稿をつくる）	
備考 （自由記載）			